

第87回麻布獣医学会 一般演題4

小分割放射線治療と外科切除を併用した猫の鼻腔腫瘍4例

村林 里奈, 溝口 やよい, 福山 泰広, 圓尾 拓也, 信田 卓男

麻布大学附属動物病院

【はじめに】

猫の鼻腔内腫瘍は全腫瘍中の1%であり、腺癌、扁平上皮癌が最も多く、その他に肉腫（線維肉腫、骨肉腫、軟骨肉腫）などの報告がある。そのほとんどが悪性で、局所浸潤性が強いいため、外科治療のみではその解剖学的位置や、十分なマージンが取れないなどの理由により、根治することが困難である。猫での報告は少なく、放射線治療では緩和効果や生存期間の延長が報告されている。今回、猫の鼻腔内腫瘍に対して外科手術と小分割放射線治療を併用しその有用性を検討した。

【材料と方法】

2009年5月～2011年9月までに麻布大学附属動物病院に来院し、病理組織検査でリンパ腫を除く鼻腔悪性腫瘍と診断され、放射線治療と外科手術を実施した4例の猫について検討を行った。治療は、放射線治療として、高エネルギーX線1回線量6～7.3Gy、計4～6回の小分割多門照射を実施した。外科療法は鼻梁部背側切開による鼻腔内搔爬術を2例で照射中に、2例で照射後に行った。

【結果】

WHO分類はT3が3例、T1が1例、すべてNOMOであった。病理組織検査は腺癌2例、線維肉腫1例、骨肉腫1例であった。治療により症状の改善が全例において認められた。生存期間は109、246、305（生存

中）、549日、生存期間中央値は275日であり、生存中の1例は再発徴候がなく、死亡した3例の死因は腫瘍の再増大による局所死であった。放射線障害は急性障害として脱毛と皮膚色素沈着が1例で認められたが、晩発障害は認められなかった。また術後合併症として、鼻炎1例、皮下気腫が2例で認められたが、早期に改善した。

【考察】

今回の4症例の生存期間中央値は275日であった。2002年のRJ Mellanbyらの小分割放射線治療単独では生存期間中央値が382日と報告がある。それに比べると延命効果は認められなかったが、照射方法や進行度が違うため一概には比較できない。今回、2例は早期に再発した。このことは、診断時に予想以上に腫瘍が浸潤しており外科手術で取り切れていなかった可能性が考えられる。しかし、残りの2例は生存期間549日の症例や現在も生存しており、手術による確実な切除が行われれば、局所再発期間を延長できる可能性が示唆された。今回の治療方法は一時的に臨床症状の改善が見られ、外科手術による合併症や放射線障害が軽度なことを考えると、診断時の腫瘍浸潤度を見極め、適応症例を検討することで、外科療法と小分割放射線療法を組み合わせることは猫の鼻腔腫瘍の治療オプションとして考えうると思われる。